

## 被災地でみた災害医療の限界

令和6年1月1日、私の住む石川県能登地方で最大震度7を観測する大地震が発生した。私はその時、家族で珠洲市にある祖母の家に帰省をしていた。楽しみにしていたサッカー中継の直後、大きな揺れに襲われた。揺れが落ち着き、外に避難すると、家は半壊し、地面は地割れしていた。何が起きたか理解する暇もなく、私たち家族は近くの中学校まで避難した。

避難する途中、「誰か！」と、助けを求める声や、土砂に押しつぶされた車、全壊した家屋、見たことも無い景色が辺り一面にあり、これが現実なのかと疑った。

さらに衝撃を受けたのは、避難所の中学校に入った時だ。負傷者が沢山運ばれ、1人の看護師が順番に応急処置に当たっていた。能登地区は高齢化が著しく、過疎化した地域であるため、若い医療従事者が全くいなかった。心臓が悪いおばあちゃん、瓦礫で足が潰れた男の子、臨月の妊婦、助けを求める声が常に聞こえていた。道の地割れが酷く、緊急車両も通れなかったため、到着が遅れていた。私も看護学生としてなにかしたい、手伝えることはないだろうかと、負傷者の集まる部屋を訪れたが、あまりにも悲惨な光景で足が震え、何も出来なかった。苦しんでいる人を前にして、何もできない現実が悔しかった。

避難所で生活をして2日目の朝、ようやく救急車や、ドクターヘリが到着した。

水や高齢者用オムツの支給もされた。若い者たちで手分けして、高齢者のオムツ交換を行った。医療従事者はこの時5人に増え、初日よりスムーズに負傷者への対応がなされていた。しかしまだまだ手は足りず、避難所から出て病院に行く手段もなく、なんの設備もない中学校での応急処置が続いていた。もっと迅速な対応ができていれば、救えたかもしれない命を沢山みた。過疎化が進んだ地方での震災であったため、仕方がない、どうしようもないこともあったと思うが、このような事態が起こった時、もっと早く対応ができるような設備を整えておくことが大切なのではないかと感じた。

私は今回の震災を体験して、災害医療の現実をみた。

もっと早く、より多くの医療従事者を、と、頭で考えて願うだけならいくらでもできるが、実際そう簡単に実現するようなことではないとこの身をもって学んだ。

この先何年かかったとしても、この地震大国である日本には、万全の災害医療の体制を確保し、備えることが絶対に必要なのだと考える。

私も今後災害看護について学び、現時点ではどこまでが可能で、どのような課題が残されているのか、もっと知りたいと感じた。

そしてもしまた同じような災害が起こった時、今度は震えてなにもできない私ではなく、1人でも多くの命を救えるような私になって、真っ先に救護に当たりたいと強く思う。